

【図画工作科】教科提案

「3つの対話」でつなぐ造形活動 ～多様な素材体験を積み重ねて～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

図画工作科は、昨年「3つの対話」でせまる造形活動「～多様な素材体験を積み重ねて～」を教科提案として取り組み、変化する素材に継続的、かつ多様なかかわりを持つことが素材への認識力を高めることや、自然素材の心地よさが言語化を促すことなどの成果があった。また、個性を追求していくという教科の特性から、他者とかかわりながら表現活動を進めることの効果よりも、「見せたい」と思う題材に出合い、「こんなに見えるよ、見て」と能動的に「見せよう」とする、「他者とかかわり」の方が、表現意欲を高めるのではないかという仮説を得た。

図画工作科は、造形活動を通してつくりだす喜びを感じながら、思いや体験に「自分のイメージ」をもち、「色・形を組み合わせ」て表現し、情操を養うことを目的とする教科である。

本校の「学びをデザインする子どもたち」では、「対象」「他者」「自己」との対話を「三位一体の対話」としている。そこで、造形活動における「対象」「他者」「自己」との対話とは、どうかかわりを指すのかを改めて考えてみたい。今年度のサブテーマは「つなぐ」「つむぐ」「つくる」である。図画工作科においては、既習の技法や表現したい思い、使いたい素材などバラバラに存在しているものを「つなぎ」、1つの作品へと「紡ぎ出し」、自分のイメージや思いをまさに自分の分身である作品として「作り出す」作業や活動を通して新しい自分を「つくる」ことに当てはめて、取り組んでいきたい。

(2) 図画工作科がめざす子ども像

学習指導要領では図画工作科の目標を次のように定めている。

「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」

「感性を働かせながら」という文言は、今回の学習指導要領で新たに加えられた。学習指導要領解説によると「感性」とは、「様々な対象や事象に心に感じ取る働きであるとともに、知性と一体化して創造性をはぐくむ重要なもの」であり、「これを手掛かりに児童は発想をしたり、技能を活用したりしながら、自他や社会と交流したり、主体的に表現したり、よさや美しさを感じ取ったりしている」とある。つまり、図画工作科では、児童は「感性を働かせながら」、「対象」「他者」「自己」と対話をしていると言い換えることができるのではないか。

石器時代の昔から、人は絵をかき、道具を工夫してきた。また小さい頃から身近な素材に働きかけ、紙に線を書いて意味付けたり、物を積み上げて形を構成したりする行為を重ねて成長する。つまり、表現することは人がもともと持っている欲求であり、能力であるということができる。

そして人は造形的な表現活動を通して人間らしい感情を育てていく。

そこで、ヒトの進化のすじみちにそった自然素材へのかかわりを、典型的かつ系統的に積み上げていくことでより豊かな人間らしい感情が育つのではないかと考えた。

造形的な表現活動の基礎的な能力を身につけさせ、生活や社会に主体的に関わろうとする態度を育て、豊かな感情を育てるため、図画工作科で目指す子ども像を以下のように考える。

○造形的な表現活動の基礎的な能力を身につけた子

○表現や鑑賞活動を通して、生活や社会に主体的にかかわろうとする子

○自らつくり出す喜びを感じる子

2. 図画工作科における「学びをデザインする子どもたち」

本校の学校提案は「学びをデザインする子どもたち」であり、このためには「3つの対話」が重要であると考えている。

すなわち、「対象との対話」「他者との対話」「自己との対話」である。

図画工作科で考えると、見たこと、体験したこと、想像したこと、など、表現したいことが「対象」であり、また、イメージしたことを表すための「色」「形」「その組み合わせ」といった表現方法や素材も「対象」である。

「対象との対話」とは、子どもが、何かを表現するときに、見たことや体験したこと、想像したことなどのどの部分を切り取って表現するのかわかりやすく選ぶ作業の過程にある。また、素材や道具の特性を知り、効果的に使う方法を考える過程にも「対象との対話」がある。

表現する過程で、友だちの発想や表現方法にヒントを得たり、教師の助言を取り入れたりする過程に「他者との対話」があり、できた作品を見て他者の表現のいいところをお互いに評価し合う場面にも「他者との対話」がある。このようにお互いの表現のいいところを見つける活動を積み重ねることで、自分のもった「イメージ」をより分かりやすく「他者」に伝えようとしたり、作品を見て、作り手がどんなイメージを表現しようとしたのかを読み取ろうとしたりする「作品を通しての他者との対話」が生まれる。

加えて、自分がイメージしたことを表現できたかどうかをたえず自己に問い直したり、表現手段を発見・工夫したりして、自分が納得する表現を追究していく「自己との対話」がある。図画工作科における「自己との対話」とは、「対象との対話」「他者との対話」を行う過程で、テーマやイメージ、表現方法を考え直したり、再確認したりすることである。しかし、図画工作科を通り越してしまうのであるが、「自己との対話」が最も課題となるのは、自意識を確立していく思春期以降ではないかと考える。自分の表現活動を通して、自分はどのような存在なのかを問い直していく過程こそ、本当の自己との対話の価値がある。小学校での「自己との対話」は、友だちと自分の表現を比べたり、影響し合ったり、誰かに見せようと思いを工夫したりしながら、自分なりの表現を追究していくことといえるかも知れない。

指導者は、表現活動の過程を大切に、工夫やつまづきに注目していく。また、表現したものをもとに話したり、発表したりする場を保障し、子どもたちの変容をみとっていくようにする。

	低学年	中学年	高学年
課題解決	身近にある多様な素材にかかわり、自分なりの発見や気づきをする	見通しを持って表現活動に取り組み、主題性のある作品をつくらうとする	主題性を追究した作品に取り組もうとする
対話	「対象との対話」に重心をおく活動	「対象」に加え「他者との対話」を意識した活動	「対象」「他者」に加え、「自己」に問いかけていく活動
学び方	多様な素材体験の中で、感覚・感性を育て、言葉などで感じや気づきを表す	多様な表現方法や、他者の感じ方やイメージに触れながら、自分なりの表現をしようとする	素材や表現方法の知識をひろげ、「伝える」ことを意識して、主題性を追究した表現をしようとする

鑑賞の授業の一場面を紹介する。これは、「真美人」という題の浮世絵で、和装の女性が洋傘を持っているという構図である。子どもたちは絵の中に根拠を見つけ、話し合いを行った。絵の下に書かれた「人美真」の文字に注目した場面である。この文字と描かれた小道具や既知の内容を照らし合わせて、「人美真」の意味を読み解こうとしている。

C：街を歩いていて、この人がそう呼ばれているのかも知れない。

C：真実のってことだから、本当の美人。

T：この人、本当にきれいですか。

C：昔の美人。お化粧している。

T：昔は美人やったということ？

C：本持っているからわんぱくじゃない。大人しい人。

C：百人一首に出ている人みたい。

T：そのことに気づいた人いますか。

C：姫さま。

C：化粧してるけど、昔の人はあんまり化粧せんかった？

T：〇〇くんたち こんな美人見たことありますか

C：坊主めくりの坊主、こんな顔やった（姫とまちがっている）

C：化粧してなくてこんな顔怖い。

C：顔が真っ白なお化粧は…

着物は今はお祭りとかお墓参りとかしか着ないから今じゃない。

3. 研究の展望

・多様な素材体験に関わること

図画工作科は、「表す」活動の過程で表現対象である経験を追体験したり、ものに主体的にかかわったりする活動によって対象や、表現手段である色・形、素材への認識力を高める。

人間の進化の過程には、手や道具を使っての自然素材への主体的な関わりが欠かせない。

しかし、生活環境の変化により、自然素材に関わる機会は少なくなった。そこで、基本的な自

然素材である草木、土や石に紙などを加え、これらを手や道具を使って加工する多様な機会をもつことを大切に取り組む。その素材で何を制作するかを急ぐよりも、素材の感覚を手や体で感じさせたい。造形遊びの活動の中から仲間との対話が生まれ、自然に何かを制作しようという動きが出てくる。このような素材体験の機会を多く持ちたい。

・造形活動がもつ「対話性」に関わること

造形活動には、絵画や彫塑、工芸のように、自分の思いや経験、アイデアなどを思いのままに表現するという自己表現の手段という側面が強いものがある。と同時に、ポスターやアニメーション、映画など映像メディア作品の多くのように、メッセージや伝えたいこと、考えたことなどを相手に分かり易く伝えるための伝達手段としての側面が強いものもある。

思いのままに創造することに加え、「見る者」「使う者」を意識し、作品づくりを行なうことで、「見せ方」を工夫しようとする、多角的な見方が育つのではないかと考えた。

造形活動の中には、いかに自分らしい表現を追求していくかという性格を持つものが多い。しかし、「見え方」を予想し「見せ方」を工夫するためには、相手にどのように見えているのかを知る必要がある。

そこで、対話による鑑賞を取り入れ、著名な作家による作品や友だちの作品を鑑賞の機会を多くしていきたい。

4. 研究の評価

・多様な素材体験について

どの素材でどのような学びがデザインできるのかは、その素材を使った作品や、言葉や動作での作品の説明やお話などから、探ることができるのではないかと考えた。また、発見や気づきを表現する言葉が多様になることは、感覚や情操を養うことにつながるのではないかと考える。

・表現活動における「対話性」について

「対象との対話」について

同じ「対象」にはたらきかけても、その感じ方や気づきは、多様である。どのような対象にどのように出合わせることで多くの気づきや発見をうながすのかを研究したい。

「他者との対話」について

できた作品や美術作品について鑑賞の機会をもつ時、どのような鑑賞の視点を与えることが、協同的な学びをうながすのか、どのような方法での鑑賞指導が多くの「感じ」を引き出せるのかを研究したい。また、思いや表現したいことを相手に「伝える」ために、「見え方」を予想し、「見せ方」を工夫しながら自分なりの表現ができるようにしたい。

「自己との対話」について

自分のイメージや経験の中から、何を選び出して表現するのか、また、鑑賞などを通して、どの素材やどんな表現方法で効果的に自分の思いを表現として紡ぎ出させるのかを研究したい。